

Character and Story

近くにいる人は子どもの様子などを優先して
子どもの思い・意見や気持ちを聞いていない。
100%子どもの側に立って子どもが意見を言うことを応援し
子どもが望めば代弁する。
このシステムが「アドボカシー」なんです。

志治 優美 さん

CAP みえ エンパワメントみえ 代表 一般社団法人子どもアドボカシーセンターMIE 理事
一時保護所へは毎月 2 箇所 に 2 回ずつ。学校へは月 3 回訪問しています。
いま、活動に必要なものは、アドボケイトとして活動できる人とそれを支えてくれる人、そして拠点です。
詳しい活動内容は次の QR コードにて紹介しています。



CAP みえ



エンパワメントみえ



一般社団法人
子どもアドボカシーセンターMIE

市民活動のきっかけを教えてください

子どもが3歳になる頃に生の演劇を見せたくて「子ども劇場」に入会しました。子ども劇場は年間数回公演がありましたが、そのうちの1回を自分たちで企画してみませんかと声を掛けられました。

どの劇団を呼んで、どういう流れでやるか、子どもたちにどういった楽しみが増えるのかと会員にプレゼンするんです。

もちろんチケットを売ったり劇団の昼食のおにぎり準備したりとか、全部自分たちです。そのことを考えて進めていくことが、とても楽しかった。

ボランティアで、それでいて子どもたちをここまで楽しませてもらって、すごいところだなと思いました。

志治さんが関わっている活動、CAP みえ・エンパワメントみえ・(一社) 子どもアドボカシーセンターMIEについて、これらの特長を教えてください。

この3つの活動の共通することは子どもの権利保障です。

「CAP みえ」は、権利教育を。子どもの権利をベースにした暴力防止活動。子ども自身が自分の権利を保障するために、暴力からどうやって自分の心とからだを守ろうかっていうCAPプログラムを伝える活動です。

そのプログラムの柱は①人権教育②エンパワメント③コミュニティプログラムです。

「エンパワメントみえ」は、この2つ目の柱 エンパワメントを広めていく活動です。

エンは内側、パワーは力。私たちみんな誰もが力を持って生まれてきているというのが大前提の考えです。

これは腕力とか権力とか外に付いた力ではなく、私たちの中に秘めている力。それを本人が発揮できるよう引き出していく。それをエンパワメントといいます。

例えば本人がすごく悩んでいてどうすることもできないと打ち明けてくれたとします。

そこでこうすれば、ああすればと一緒に考えることもありますが、本人が自分には力がないと思い込んでいて何もできないのではなく、あなたは「よく私に話してくれましたね」「話す」という力があるってことを本人に気づいてもらうことです。

現実甘んじていることでもなく、なんとか抵抗しようとして今こうして人に打ち明ける。

「それがあなたの力ですよ」と。

その子の持っている力に気づいてもらって発揮すること。



「(一社)子どもアドボカシーセンターMIE」は、子どもの声を聴く活動です。声を聴いてどうするかっていうと、子どもの希望を実現するという活動ですね。子どもの頃ってなにかやってほしいとかこれが欲しいとか頑張って言っても、子どもだからそんなこと言わないものだから、口出しするなとかよく言われましたよね。

そうすると子どもは何も言えない。何とか声出してほしいので、声を出せるようにこっちから働きかけ「あなたはどうしたいの？」と望みを聴いて、その望みが叶うように手伝う活動です。

このアドボカシーが日本で広まったのは、関東で小学3年生の女の子が父親に虐待されて亡くなったのがきっかけです。

その子は父親から虐待されていることを学校のいじめのアンケートに書きました。

「お父さんにいじめられているので助けてください」と。

それを知った父親は教育委員会に乗り込み、教育委員会はその手紙を父親に見せてしまったのです。そしてますます父親の虐待がひどくなり、その子は亡くなってしまった。

その後この事件のほかよく似た事件が起きました。

もっと子どもの声をきちんと聴くアドボカシーを日本に取り入れていこうというきっかけになりました。

私は、以前からアドボカシーという言葉を知っていましたが、どうやって活動していいのかわからなかったし、当時教わることも知らなかったのです。

でも実は日本で先駆者がたくさんいたのです。

障害者のアドボカシーは以前からありました。障害のある人たちや子どもたちの声を拾い上げて必要ならば代弁していきましょうと。ここ5年くらいで広がっていきました。

「CAP」は権利教育、「エンパワメント」は権利を守るスキルを渡す活動、「アドボカシー」は子どもの声を届けたい人に届ける活動。

みんな繋がっているけど、大きな目的は「子どもの権利保障」です。

どういシステムなのか教えてください。

親から離れて暮らしいる子どもたちの施設、児童養護施設とか乳児院、自立支援施設とか子どもの育ちを行政がおこなっている施設があるんですね。

里親もそうですが、そういうところで育つ子供を社会的養護の子どもたちというんですが、そこにいる子どもたちの声を聴いていくことから始めてくださいというのが国の方針です。

それで三重県がその事業に手を上げて、それを私たちに委託されたのでそれらの施設を訪問しています。

また、こちらから提案して行っているのが「学校」です。

今三重県で約 2000 件の虐待通報があり、虐待されている子どもは 2000 人。

2000 人のうち 1 割しか社会養護施設に入れません。

虐待通報の 9 割は自宅に返しているんですよ。

だから、その子たちがどうしたいかっていうのを誰も聴きに行けないんですね。

社会的養護の場だけでなく、地域にも学校にも「アドボカシー」は必要なんです。

子どもたちから聞いた話はどうするのですか。

本人の許可なしにはどこにも漏らしません。

あの子がこう言ってきましたよと本人が言ってほしいと言わない限り言わないです。

子どもが困っていたら、何とかしてやりたい、解決に向かって動きますが、子どもの望みに従います。

「子どもには自分で解決していく力がある それを待つ」

人はより良く生きたいという望みがあります。

その気持ちを話してほしいのです。



今までで印象に残っているケースは。

児童養護施設に入っていた子。その当時は高校 3 年を終えたら養護施設を出なければならないという決まりがありました。

その子にはその施設に弟と妹がいるんですね。その 2 人を残して自分だけ出なければならないことにすごく悩んでいる。その子たちがその施設に入ることになったのは、お母さん 1 人で 3 人を育てていた。そのお母さんが自死してしまった。それを発見したのはお祖母ちゃんと自分だった。そのことを弟や妹には言っていない。これからも絶対話さない。

もし弟や妹になにかあったときに自分は駆けつけることができるか。なにより自分はこれから一人でやっていけるのか、そんな話を聞いて、胸がしめつけられる思いになりました。

CAP の活動で学校を訪問したときに、小学 5 年生の女の子と話をしました。

その子は松葉杖をついていました。

「どうしたの？ 足痛いね」

その子はお父さんから蹴られて骨折したと話してくれました。

「そのことを誰か知ってる？」と聴いたところ、周りの人はいつもお父さんから蹴られていることは知っているけど、骨折したのはお父さんのせいだとは誰も知らない。

誰にも言えないと。

「それ、誰かに言ったらきっと助けてくれるシステムがあるよ」と言ったんです。

その子が、先生に話してみようかなと。

その後児童相談所から聞いたのですが、その子が先生に訴えたと学校から電話があったと。

そしてその子が高校 3 年生になったときに、施設で会ったんですよ。その子が私の顔を覚えててくれてあのときの私ですって。お互いが泣きましたね。

その子は福祉の仕事がしたいから学校に進学すると教えてくれました。

だって CAP の人みたいに誰かを助けたいって。

泣けましたよ。

インタビューを終えて

子どもたちの話を聞いてモヤモヤを抱えながらも翌日違う現場に向かう志治さん。

どうやって気持ちの切り替えをしているのでしょうか。

「帰ってから泡（ビール）が私を癒してくれます」
時々自宅で居酒屋さんごっこをされるそうで、おつまみは本格的！

「いやあ、ここの居酒屋、品切れが多いんですよ。」

これからも志治さんの到着を子どもたちが待っていますね。

映画『スミス都へ行く』（1939年）

アメリカの政治ドラマであり、純朴で理想に燃える青年ジェファソン・スミスが、腐敗した政治の現実と直面しながらも、自らの信念を貫こうと奮闘する姿を描いています。民主主義そのものが抱える構造的問題を鋭く指摘しており、現代における政治と市民社会の関係を考える上でも考えさせられます。

「何も知らない操り人形」としてスミスが上院議員に選ばれます。これは、民意や適性ではなく、政治的な都合や利害関係によって人材が選出されるという、民主主義制度の盲点を突いています。民主主義はあくまで「形式」としては民衆の意思を反映する体制であるものの、その運用は既得権益や権力構造に左右されるという、構造的な問題が出発点として描かれています。

スミスの理想は制度としての民主主義がもつ建前と合致しています。しかし、現実の議会では議員が癒着し、裏取引を行い、言論の自由さえ形骸化している様子が明らかになります。これは、民主主義という制度がもつ本来の理想と、現実のギャップ、すなわち制度疲労や制度の形式主義化という構造的問題の表れといえます。

スミスが汚職の事実を暴こうとすると、地元の新聞は彼を中傷し、世論を反対に導こうとし、民主主義社会における本来「第四の権力」として機能すべきメディアが、既得権益と結託することで真実の可視化を妨げるという構造で、情報の独占と操作は、市民が適切な判断をするための機会を奪い、民主主義を空洞化させます。

これは現代社会にも通じる深刻な課題です。政治とメディアの癒着、SNS上のエコチェンバー、フィルターバブル、広告資本の支配下にある報道体制、アテンションエコノミーなど、情報の偏りは市民の意思形成や選択に大きな影響を与えます。民主主義における構造的問題とは、こうした制度の外見は「開かれている」ものの、実質的には閉鎖的で矛盾なのです。

スミスが上院でたった一人、長時間演説によって声を上げ続ける姿は、民主主義の中に生きる「マイノリティ」の象徴。民主主義の制度は多数決原理に基づいていますが、これがそのまま多数の専制を招くこともあります。制度の中で意見が通らない者、排除される者が存在する場合、民主主義は逆説的に差別や格差を助長する側面を持ち得るのです。

スミスの演説は議会では黙殺され、新聞でも歪められます。しかし、最終的にスミスを救うのは、彼の信念を信じて行動した子どもたち、そして草の根の人々の力です。これは、民主主義を支える力が制度ではなく、市民の行動と連帯にこそあることを示しています。制度内での少数派の声は、制度外の市民社会によって支えられる構図は、構造的問題を克服する鍵なのです。

市民による政治の刷新」という民主主義本来の理想の再生は制度の改革によるものではなく、個人の誠実さと市民の連帯によってもたらされている点です。これは、構造的問題を制度の中だけで解決することの限界を示しており、最終的には制度を動かす「人」のあり方が問われているのです。

この観点から見ると、『スミス都へ行く』は「民主主義万歳」の映画ではなく、むしろ民主主義の内部に潜む構造的問題を暴きつつ、それを乗り越えるための道筋を市民の行動に求めた批判的作品であると捉えることができます。

映画公開から80年以上が経った現在も、民主主義国家の多くが、政治腐敗、メディアの偏向、少数派の排除、市民の政治的無関心といった問題に直面しています。これらは一見「偶発的な問題」のように見えて、実際には民主主義の制度自体が内包する構造的な欠陥であることを、『スミス都へ行く』は時代を超えて問いかけているのです。

民主主義は、制度として完成されたものではなく、常に更新され、問い直されるべき「プロセス」です。自ら考え、声を上げ、行動する市民がいることで、初めてその制度は意味を持ち、構造的問題の解決とは、単に制度設計を改めることではなく、制度の枠内外で「市民が主体となって育てていく民主主義」そのものを問い続けることなのです。

『スミス都へ行く』は、民主主義の理想と現実、その構造的問題を深く掘り下げた映画です。制度的な民主主義の限界を突きつけると同時に、市民の行動と連帯が新たな可能性を生み出すという希望も提示しています。構造的問題は、制度の欠陥ではなく、そこに無自覚でいる私たちの姿勢そのものに潜んでいるのかもしれない。